

## ■文章、段落、文

- 小説、詩歌、手紙など、ひとつのまとまった文の集まりを文章という。
- 文章を意味の上からいくつか区切るとき、そのひとまとまりを意味段落、もしくは単に段落という。
- 文章が、行を改めて一文字下げて書いてある切れ目を形式段落という。形式段落がいくつか集まって意味段落になる。
- 句点「。」で区切られたところまでを文という。読点「、」は読むのを助ける区切り。まとめて、句読点という。

## ■文

- 文を分類すると、単文・複文・重文がある。

### ▼ 単文

- ◇ 主語と述語の組み合わせがひとつ。  
主語「白鳥」 述語「湖に來た」。

### ▼ 複文

- ◇ 主語と述語の組み合わせが複数。  
彼が走つてくるのが 見えた。
- ◇ 「彼が走つてくるのが」が連文節の主部、連文節の中に主語・述語がある。

### ▼ 重文

- ◇ 主語と述語の組み合わせが、重なったようになっている。並立の関係にあること。  
雨~~が止んで~~、風~~が吹いた~~。

## ■文節

- 文をより細かく自然に分けた単位。「ネ」「サ」「ヨ」などを入れて不自然ではないか、確認できる。文法的には、自立語は単独で分節。付属語は単独で文節にならない。「自立語＋付属語」の形で文節になる。↓品詞を参照

- 文節の関係を、主語・述語・修飾語・接続語・独立語・並立・補助に分類する。

### ▼ 主語

- ◇ 文の主題、「が」「は」がつくことが多い。「も」「こそ」「ばかり」などの場合も

る。倒置法の場合もある。また、主語が省略される場合がある。

● 花が咲く。 これは花だ。

● これこそ桜だ。 花もさく。

● 走るぞ、ボクは。 (倒置法)  
とうちほう

#### ▼ 述語

◇ 主語に対する説明。性質、動作、状態など。

● 花が咲く。 これは花だ。

● これこそ桜だ。 花もさく。

● 走るぞ、ボクは。 (倒置法)

#### ▼ 修飾語

◇ かかる文節を修飾語、受ける文節を被修飾語という。 ↑これ重要。

● 赤い自動車が猛スピードで走る。 (修飾語)

▼ 「赤い」は「自動車が」にかかる。 たいげん 体言 (名詞) を修飾するので、連体修飾語という。

▼ 「猛スピードで」は「走る」にかかる。 ようげん 用言 (この場合は動詞) を修飾するので、連用修飾語という。

#### ▼ 接続語

◇ だが、けれども、そして、しかし、しかも (1単語)

◇ 熱いので、努力したが、寒いから (2単語以上)

#### ▼ 独立語

◇ 他の言葉に関係なく独立している。

● ああ、きれいだ。 (感動)

● はい、わかりました。 (応答)

● おかあさん、ちよつときで。 (呼びかけ)

● 8月15日、 この日は終戦記念日だ。 (提示)  
ていじ

#### ▼ 並立

◇ こんなに 見事に咲いた。 (修飾部・並立)

#### ▼ 補助

◇ 犬が走って くる。 (述部・補助)

● 文節が強く結びついてひとまとまりとなっていてるとき、複数の文節結びついて連文節 れんぶんせつ になる。

となっていると扱う。連文節の関係を表すときは、主部・述部・修飾部・接続部・独立部という。

▼ サッカーの試合は続いた。(主部)

▼ 犬が走ってくる。(述部)

▼ 花がこんなに見事に咲いた。(修飾部)

▼ 春は来たけれども、雪は残っている。(接続部)

▼ おじいさん、おばあさん、僕は楽しく過ごせました。(独立部)

■ 単語……文節をさらに分けたもの。単語は文節で「自立語＋付属語（＋付属語）」の形のものをさらに2つに分けて単語とする。言語の文法上の最小単位。言語の最小単位である単語は、品詞ひんしに分類される。教科書の分類に従えば、十一に分かれる。

◆ 自立語……単独で文節になれる語。

- ・ 活用がある……文中の働きによって語尾が変化すること。活用形には、未然形みぜんけい・連用形れんようけい・終止形しゅうしけい・連体形れんたいけい・仮定形かていけい・命令形めいれいけいがある。
- ・ 未然形……「まだその状態にない」ときの形。「ない」「う」「よう」につながる。

・ 連用形……用言ようげんにつながる形。「ます」「た」につながる。

・ 終止形……言い切りの形。

・ 連体形……体言たいげんにつながる形。「とき」につながる。

・ 仮定形……仮定するときの形。「ば」につながる。

・ 命令形……命令するときの形。

☆ 述語になれる(用言)

・ 動詞……動作・作用・状態・存在を表す。

▼ 活用の種類……打ち消しの「ない」を動詞につけてみる。

◇ 五段活用……「ない」をつけたときの語尾がア段音のとき。「書く」の場合、

未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形・命令形の順に並べる

『学校文法では、「文節」を重要視した、国語学者・橋本進吉(1882 - 1945)による「橋本文法」が中心になっている。(ウィキペディア)

と  
「か き く く け け」となる。それ  
ぞれ、  
「ナイ」「マス」(言い切り)「トキ」「バ」(命令の形)  
という言葉に続けるときの変化と対応する。

● **五段活用**の連用形には音便おんびん(発音のしやすさから、音が変化すること)がおきる場合がある。

▼ イ音便……………咲きて↓咲いて、泳ぎて↓泳いで

▼ ウ音便……………思ひて↓思うて

▼ 撥音(はつおん)便……………呼びて↓呼んで、死にて↓死んで

▼ 促音(そくおん)便……………立ちて↓立って、ありて↓あって

◇ 上二段活用……………「ない」をつけたときの語尾がイ段音のとき。「見る」の場合

「み み みる みる みれ みろ(みよ)」

◇ 下一段活用……………「ない」をつけたときの語尾がエ段音の時。「受ける」の場合

「け け ける ける けれ けろ(けよ)」

● **可能動詞**……………もとは五段活用の動詞が、下一段活用に転じて可能の意味を持つようになったもの。「読む↓読める」「書く↓書ける」「歩く↓歩ける」

ちなみに、「歩かれる」は「歩く」の未然形「歩か」+可能の助動詞「れる」であって、可能動詞ではない。

◇ カ行変格活用……………「来る」の一語のみ。

「こ き くる くる くれ こい」

◇ サ行変格活用……………「する」の一語のみ。ただし複合語多し。「せ(さ)(し) し する する すれ しろ(せよ)」

● サ変の未然形は、「(せ)ぬ」「(さ)せる」「(し)ない」につながる。

● 複合語の例

▼ 和語+する……………うわさする、びつくりする

▼ 漢語+する……………運動する

▼ 外来語+する……………テストする

▼ 補助動詞(形式動詞)……………動詞が**本来の意味と自立性を失って**、助動詞のように前の文節を補助するとき、これを補助動詞という。

◇ お帰りがさる。見ていただく。やってみる。みせてあげる。暮れていく。残しておく。貸してもらう。枯れてしまう。

▽ 自動詞じどうし（それ自身の動作や作用を表す。）と他動詞たどうし（他に対する働きかけを表す。）

◇ 自動詞と他動詞の活用が同じ場合

● 水が増す（自動詞）、水を増す（他動詞）

◇ 活用が異なるもの

● 船が沈む（四段）、船を沈める（下二）

◇ 「を」が必要な場合を他動詞。「が」で文ができるのが自動詞として見分けることができる。また、他動詞は受け身の文（英語で言う受動態の文）が作れる

● 私は本を買う。（他動詞）本は私に買われる。（受動態・他動詞）

▽ 複合動詞

◇ 動詞と別の語が組み合わさってできた動詞。

● 動詞＋動詞

▽ 思い出す、走り回る、見送る

● 名詞＋動詞

▽ 説明する、名付ける

● 形容詞語幹＋動詞

▽ 長引く、若返る、近づく

▽ 敬語動詞

◇ 尊敬そんけい、謙譲けんじょうに用いる。

● 先生はご覧になりたいとおっしゃいました。（尊敬）

● 父がうかがいたいと申しています。（謙譲）

・ 形容詞……性質・状態・心情を表す。

▽ 活用「かろ かっ（く） いい けれ」

▽ ウ音便が起きる…近く↓近ちこう、楽しく↓楽しゆう

・ 形容動詞……性質・状態を表す。内容は形容詞的。語の接続は動詞的。

▽ 活用「だろ だっ（で）（に） だな なら ○」

※用言ではないが、名詞＋「だ」も述語になる。

▽ 例文…「あの花は梅だ。」

ちんじゅつ  
陳述の副詞（叙述の副詞）……述語に一定の言い方を要求する。  
じょじゅつ

の副詞と述語の関係を副詞の呼応こおうという。「決してない」「まるで」  
 ようだ」「まさかまさかない」

☆独立語になるもの

・感動詞……単独で文になれる

▼ 呼びかけ……おい、もし

▼ 応答………はい、いいえ、

▼ 感動………ああ、おや、まあ

・接続詞……単語や文を接続する。

▼ 対等の関係を示すもの

◇ 並列……および、また

◇ 添加……それから、それに、なお、しかも

◇ 選択……それとも、または、もしくは、あるいは

▼ 条件と結果の関係を示すもの

◇ 順接じゅんせつ……したがって、そうして、そこで、そうすると、それだから、それゆえ、だから、では、それなら、それでは

◇ 逆接ぎやくせつ……が、けれども、しかし、しかしながら、ただし、ところが

▼ 話題の転換を示すもの……さて、ところで、では

※名詞が独立語になる場合がある。

▼ 提示………「イギリス、ビートルズの国だ。」

◆ 付属語……自立語に付属して文節をつくる。単独で文節になれない語。日本語の特徴を決める重要な要素。

★活用がある（接続のしかたと活用についても注意して覚えておく。↓文法書を見よ）

- ・助動詞……用言・体言に意味を加える。主として話しての判断を示す。

▼ れる・られる 受身・尊敬・可能・自発じはつ

▼ せる・させる 使役・尊敬

▼ ない・ぬ（ん） 打ち消し

▼ う・よう 推量・意志

▼ た 過去・完了・存続。

五段活用のイ音便と撥音便につくときは「だ」となる。

- ▼ そうだ・そうです 様態・推量
- ▼ たい・たがる 希望
- ▼ ます 丁寧
- ▼ まい 打ち消し推量・打ち消し意志
- ▼ らしい 推定
- ▼ そうだ・そうです 伝聞
- ▼ ようだ・ようです 同等・比較・例示・不確かな断定
- ▼ だ・です 断定

★活用がない

- ・ 助詞……語の関係を示し、意味を加える。前の語が後の語とどういう関係にあるか示す。話し手の心情。文を完結するなど。
- ▼ 格助詞……主として体言について、文中の他の語との関係を示す。
  - ◇ が、の、を、に、へ、と、より、から、で、や
- ▼ 接続助詞……接続の文節をつくる。
  - ◇ ば、ても、と、けれども、が、のに、ので、から、て、で、し、たり、ながら
- ▼ 副助詞……いろいろな語について、意味を添える、また下の文節を修飾する。
  - ◇ は、も、こそ、か、さえ、でも、しか、なり、やら、ほど、くらい、だけ、まで、ばかり、など
- ▼ 終助詞……主として文末にあつて、希望・禁止・感動などの意味を表す。
  - ◇ な、か、の、な、ぞ、とも、よ、わ、こと、もの、ね、ねえ、さ

■ 接頭語・接尾語

単語の前後につく。意味をそえる、語調を整える、強める。接頭語＋単語、単語＋接尾語の形のもを派生語という。

お茶碗、か細い、こ憎らしい、す手、所知らぬ、たなびく、ま夜中  
 私たち、鈴木さん、寒さ、人間み、お客さま、りこうぶる、おこりつばい

参考文献

新総合国語便覧「書籍」著者 稲賀敬二ほか監修第一学習社 1991.  
 基礎からわかる口語文法「書籍」著者 日栄社編集所、日栄社 2002.



